

2016年 8月 11日

～U-12 関東ブロックエンデバー マンツーマン推進講習会資料～

JBA 技術委員会 ユース育成部 ワーキンググループ

JBA マンツーマン推進プロジェクト 指導グループ

日本ミニバスケットボール連盟 普及技術委員長

牧野 広良

『マンツーマンを基軸とした組織・チーム・理論の構築』

【組織】

1. マンツーマン推進に関わるU-12の取り組み

(1) JBA との連携

- ①日本ミニバスケットボール連盟の先行取り組み
- ②JBA マンツーマン推進委員会の発足にて擦り合わせ
- ③全国ディレクター会議
- ④基準規則等の完成。その後一部補足等追加。(資料Ⅰ＝基準規則・資料Ⅱ＝補足資料Ⅲ＝運用・資料Ⅳ＝報告書/チェック表)
- ⑤全国大会に於けるコミッショナー制度の導入決定

(2) 全国大会に於ける準備

- ①普及技術委員会から常任委員会への原案提示
- ②全国大会運営委員会との調整
- ③日本ミニ連普及技術委員会の運営・原案作成

(3) 第47回全国ミニバスケットボール大会におけるマンツーマン推奨の取り組み

- ①全国8ブロックからのコミッショナーの派遣要請とその調整
 - ア) 宿泊
 - イ) 旅費
 - ウ) 人数調整
 - その他
- ②関東(東京・神奈川・千葉・埼玉)からのコミッショナーの要請
*同上・・・関東の他県からも参加希望有り(実際に参加)
- ③コミッショナー講習会
2016年3月27日(日) 15時～ 代々木体育館 会議室 50名参加
- ④コミッショナー割り当て作成
- ⑤全国大会のコミッショナー制度の運営
 - ア) 必要備品等準備
 - ・バインダー ・筆記用具 ・チェック表(報告書) ・昼食
 - ・手当/交通費 ・ID ・研修室の確保 等

オ) ボックスアウト

カ) 方向付け (ノーミドル)

キ) チェック・バンプ

ク) スクリーンに対するディフェンス

(3) オフェンスにおける指導ポイント

① スペーシングの重要性

② フェイスアップ

③ ギブ アンド ゴー

④ オフボールのプレーヤーの動き

ア) 長くステイしない

イ) スペースを作る

ウ) ダイブする動きのタイミング

エ) 合わせのプレーの重要性

オ) もらい足各種

カ) 7mから5m

キ) オフェンスリバウンドの習慣化

ク) キャッチボイス (捨てる方も大切)

⑤ スクリーンプレー

⑥ ワンハンドシュート (女子も必須)

⑦ 素早いモーション

ア) シュート

イ) パス

⑧ フェイク (ゲームライク) の重要性

⑨ 成長期におけるポジションの固定化を避ける

【理論】

3. マンツーマン推進の基準規則との関連

(1) ボールを持っている選手にトラップが仕掛けられる場面は次のとおり

① ドリブルが行われている時、またはドリブルが終わった時

② パスが空中にある間に移動できる距離で、パスを受けた瞬間にトラップを成立させることができる時

③ 移動が容易に行える距離にある時 (自分のマークマンとボールマンの距離の目安: 2~3m)

(2) トラップの定義 (近く JBA のホームページに掲載予定)

ボールをスティールできる距離に於ける数的優位な守り方。オフェンスとの距離はワンアーム以内。

→単純にトラップからだけ押さえると疑問が残りやすいので、上記の説明をして対応すると良い。

(3) トラップ (終息) 後のケース

マンツーマンディフェンスのためのマッチアップを明確になってないチームが見受けられた。

→引き続き継続指導を。

(4) マッチアップのオフェンスが動かないケース

ワンパスアウェイ (2線) やツーパスアウェイ (3線) のディフェンスが、ゾーンディフェンスのように見える時もあるが、ディフェンス側に問題はなく、むしろオフェンス側

に問題があることもある。アイソレーションオフェンス時等は、基準規則に則り、絞ってディフェンスしても良い。むしろ、ミニバスケットボールの精神に反しているケースが多くある。

→罰則規定はないもののオフェンスの技術向上の面から考えても、何らかの方策を考えていく必要があると結論づけた。日本ミニバスケットボール連盟では、「マンツーマンディフェンスの推進」から「マンツーマンの推進」と改め、今年度以降活動していくこととなった。

(5) マッチアップを見ないケース

ワンパスアウェイとツーパスアウェイの時、ボール中心は構わないが、ボールONLYとなつてはいけない。

→講習会等で再確認していく。

(6) スローイン時のボールマンディフェンスの視野

以前に比べオフェンスに背を向けたりして、マークマンを見ないプレーヤーは講習会等の指導の徹底のお陰で激減した。

→継続指導を。

(7) オールコートでのディフェンスの対応

①ヘルプサイドのディフェンスは、距離に於ける規定はないが、ミドルラインとの位置関係は、基準規則通り。

②ワンパスアウェイ・ツーパスアウェイにおけるディフェンスのボールONLYはゾーンディフェンスであることの確認。

→基準規則に則り継続指導を。

(8) 退場により5人以下でのプレーを余儀なくされた場合

→マンツーマンの精神は、引き継がれるものの、罰則はない。

(9) 即赤旗のケース（得点差・残り時間を考慮に入れて。）

①明らかなゾーンプレスが展開された瞬間。

②大きく局面が変わりうる場合。

(10) コミッショナーのポジション

①コミッショナー席は、TO側と逆サイド側と一長一短がある。TO席側のときは、TOの頭上で振るなど大きくわかりやすくすると良い。TO席と逆側の場合は、タイムアウト時（タイムアウトの時間は保障してあげる）など有効に活用しベンチと連携をとると良い。

②コミッショナーとベンチとのコミュニケーションは、上手に取れてきている現状が多くなってきたものの、態度の良くないベンチに対しては、審判とも対応しながら、毅然たる姿勢で臨む方向で。（U-15もテクニカルファウル導入の方向で）

③ライセンスを設ける・審判同様ワッペンをつける、等の意見はあったが、問題点も多く、実現性は低い。

- ④ベンチとのコミュニケーションについては、努めはするが判定がおろそかになったり、ゲームの流れ・進行を、大きく妨げたりしないよう工夫する。
→全国大会ではこの点を徹底した。
- ⑤コミッショナーの人数は、一長一短を考えながら対応。2人で行う場合は、どちらか1人が黄色旗と赤旗を持つ。
→全国大会では、すぐに振れるようコミッショナーは立って、両旗を持ちながら対応した。
- ⑥審判はマンツーマンディフェンスの判定はしませんので、上手にコミュニケーションをとると良い。時計が止まっている時に、審判が赤旗に気がつかない場合は、TOと速やかに連携しブザー等で審判に知らせる。
→全国大会で、実際に2分近く赤旗が揚げられたままゲームが進み、それにより勝敗も左右されうる場面があった。結果として、審判がレフリータイムを取り時計を止め、警告後試合を再開させた。審判はマンツーマンディフェンスについての判定はしないが、このケースでは、見ていて英断と見受けられた。審判委員会ともその後連携を密に取り合った。今後の一つ大きな課題といえる。

(11) コミッショナーの運営面

- ①黄色旗でプレーヤーもコーチも気付かずに、局面が変わった時は、次の同じ場面で、黄色をすぐ振り出し、赤のタイミングを計る。黄色旗を振った後、赤旗までの間、該当ベンチを指し示す。そして改善されなければ、赤旗という確認を数多くした。
→「黄色旗はビジュアルカウント的なもの。」と捉えればすっきりする。
- ②1度テクニカルファウルを取られたら（マンツーマン関係で）、次に黄色旗→赤旗となった場合は、警告でなくテクニカルファウルとなることを、理解していない方も若干いたので、説明をした。
- ③チェック表の活用について。
ア) 黄色旗で終わった場合は、チェック表への記入は必要ない。
イ) 赤旗の場合は、違反内容に記入。特記事項がなければ、競技会主催者に提出しなくても良い。また、チェック項目を記入するあまり、判定がおろそかにならない様に注意する。
ウ) 特記事項があった場合は、競技会主催者に連絡する。その後主催者は対応をする。
エ) チェック表はあくまで補助簿として用い、判定が優先。赤旗が特記事項に該当するかどうかは、慎重に判断する。
→以上のことも講習会で確認した。
- ④コミッショナーの旗について
→今回の全国大会で使ったものがとても好評だった。スポンサーの株式会社モルテンにもその旨を伝え、今後も連携を図っていく。大会本部が確認を行えば、黄色旗と赤旗の色の変更対応も可。

4. U-12 と U-15 の相違点

(1) マンツーマンディフェンスの基準規則

①基準規則違反の罰則

(注2) ゲーム終了間際(第4ピリオド・延長時限)残り2分を切ったからの違反行為(赤色の旗・警告)については、1回目の警告でもテクニカル・ファウルの対象とする。ただし、ミニバスケットボールにおいては適用しない。

また、各運営団体の定める取り決めに従い、研修を重ねること。

(2) マンツーマンコミッショナーの設置および競技会(試合)における運用について

[審判員の任務]

①2回目の赤い旗が上げられた場合

赤い旗が上がり、それが同じチームの2回目以降の違反行為の場合は、最初にゲームクロックが止まった際、主審はTO席の前に両チームのコーチを集め、コミッショナーからの説明後に、当該コーチに対しテクニカル・ファウルを宣する。
※相手チームに1個(ミニバスケットボールにおいては2個)のフリースローとスローインを与える。

②他の罰則によるフリースローがある場合

＝他の行為による罰則と基準規則違反による罰則(テクニカル・ファウル)が重なった場合＝

→他の罰則によりフリースローが与えられるときは、コミッショナーによる説明を行った後、他の罰則の処置を行い、最後に、基準規則違反によるテクニカル・ファウルの罰則を適用する。

《注意》

基準規則違反によるテクニカル・ファウルの罰則が適用される前に、新たに別のテクニカル・ファウルが宣せられた場合など、罰則の重さが等しい場合は競技規則第42条『特別な処置をする場合』に従い、処置をする。

但し、ミニバスケットボールでの適用については、「友情・ほほえみ・フェアプレイの精神」により、全て罰則を平等に適用することが望ましいとの考えから、競技規則第42条を適用せずに、起きた順序に従ってすべてのフリースローを行う。

→それぞれの罰則に含まれているスローインは取り消され、最後の処置(基準規則違反のテクニカル・ファウル)の罰則に含まれるスローインでゲームを再開する。

③試合の勝利を意識しての意図的なイリーガルディフェンス

→1回目の警告でテクニカル・ファウルとなる。

※本項は、ミニバスケットボールにおいては適用しない。

④基準規則違反によるテクニカル・ファウル

→コーチ自身のファウルとして記録し、チーム・ファウルに数えない。(スコアシートにはコーチの欄に「C」と記録する。但し、ミニバスケットボールでは「T」と記録する)

⑤コーチ自身にテクニカル・ファウルが2回記録された場合

→コーチは失格・退場になる。(競技規則第36条)

*ミニバスケットにおいては、退場とならない。